校長室だより～燦燦～ №２１７

言葉を操る

2020.10.22

スピーチ力を磨くには、ただ話し方を訓練すればいいというものではない。『本日は、お日柄もよく』という原田マハさんの小説には印象的な次のような話がある。

大手広告代理店のコピーライターであるワダカマが、こと葉に自分の「言葉の師匠」を紹介したいと言ってきた。業界で注目を集めるワダカマが師匠と仰ぐのは、どんな人だろう、という好奇心からこと葉は久美を誘って一緒に会いに行った。意外なことに、その師匠とは公設老人ホームの女性スタッフだった。

驚いたことに、そのおばさんは、さっきからひと言も話していなかった。全然、「言葉を操る」感じじゃなかった。それなのに、彼女は、天才コピーライターの師匠なのだった。

北原正子さん。「リスニングボランティア」の草分け的存在で、お年寄りの話を聞いてあげる活動を、もう十年もしている。そういうボランティアの存在を、私はその日、初めて知った。

まさに「話し上手は聴き上手」というお手本がこの北原さんなのではないだろうか。私のような教員も、研修等で「傾聴」について学ぶようになってきた。私たちは困っている人、悩んでいる人がいると、ついつい何かを教えたくなるものだが、傾聴に徹することでその人に必要な答えを自分自身で見つけるようになっていく。

このように誰かの話をじっくりと聞くことは、スピーチ力の基礎であるばかりか、よき人間関係を築く原則とも言えるのではなかろうか。

一昔前の話になるが、一人の母親が不登校の息子さんのことで大変悩んでいた。アメリカの著名なカウンセラーの先生がその息子さんと面談をした。

「面談の時間は五十分間だけど、君はそのようにこの時間を過ごしたいの？」先生の質問にその子は「僕は何も喋りたくありません」と答えた。すると、先生はしばらく考えて「分かった。では五十分間、そこに座っていなさい。喋りたくなかったら喋らなくてもいいんだよ」と話し、そこから長い沈黙の時間が始まった。

三人が沈黙のまま時間だけが過ぎていった。カウンセリング料も決して安くはない。「カウンセリングを受けないで終わってしまったら」と思うと気が気ではない。結局、何もないまま五十分間が経過し、先生は別れ際、「じゃあ元気でね。会えて嬉しかったよ」とそれだけをおっしゃり、少年は母親のところに戻った。

さて、この後、少年はどうなったのか。少年は次の日から学校に行くようになったのである。五十分間、先生がやられたのは、その子の気持ちになって同じ時間を過ごすという、それだけであった。しかし、言葉はひと言も交わさずともお互いをしっかりと理解し合えたのである。言葉を交わさずとも通じ合える世界がある。これは実に尊いことだと思う。

心を閉ざした人に対して、その人の関心に心を寄せ続け、相手の言葉を自分の中で繰り返しながら静かに寄り添っていく、それができて初めて心をつなぐ言葉を引き出すことができるように思う。教師力における大切な要素だと考える。